

## コミュニケーションの方法

2010年11月7日、誤嚥性肺炎を発症し、西別府病院に救急入院しました。嚥下障害で、気管切開をせざるをえず、音声を失いました。さらに胃ろうを造設し、経管栄養になりました。

2014年3月、肺炎で呼吸器装着。2015年8月、意思伝達装置「伝の心」が交付されました。

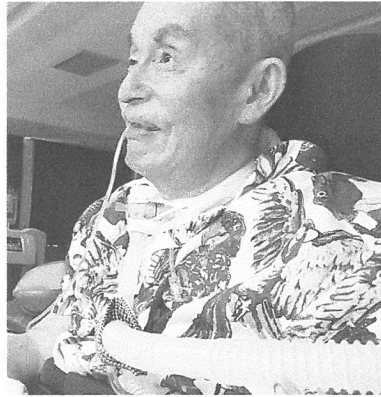
コミュニケーションは、「伝の心」のほか、文字盤、筆談などを駆使しています。仲間やスタッフの支援があるので、スムーズに会話できます。メールが日常的な交流手段です。フェイスブックやインターネット、メールリングリストから情報を得ています。不定期にメールマガジン『伝の心』を発刊しています。

## 生活の質の向上を支援

「伝の心」は身体の不自由な方のための意思伝達装置です。自分の気持ちを周囲に伝えたい、周りの景色を眺めたい、本やテレビを自由に楽しみたい…。それは身体

の自由が奪われ、話すことさえ困難になっていく、さまざまな難病と闘う患者・障害者の切実なねがいです。

センサーを使用し、身体の一部をわずかに動かすだけで、文字を「伝の心」システム装置に入力して自分の気持ちを言葉にできるの



### 大林正孝さん

おおばやし まさたか  
1945年生まれ。別府市在住。障害者の生活と権利を守る大分県連絡協議会（障大協）。27歳で進行性筋ジストロフィーと診断を受け、障大協に参加し、事務局長を歴任。現在、病院に入院しながら障害者運動にとりくむ。

## 第2回 意思伝達装置「伝の心」との出会い

続ける、新しい活動をはじめるといふようにさまざまな可能性をひろげることができません。「伝の心」は患者・障害者の意思を解き放つ翼になっています。

## 「伝の心」による意思伝達の限界

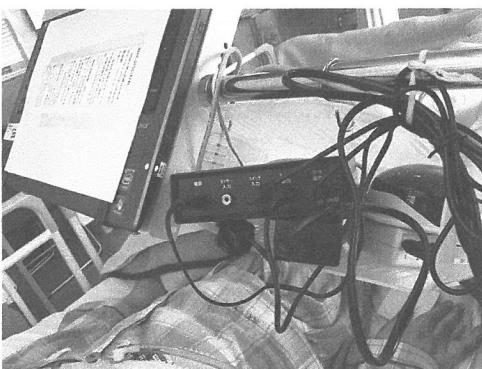
私は2015年  
度から大分県への  
要望集めと要望書  
づくりにとりくん  
できました。しか  
し昨年度来、「伝  
の心」を頼みにす  
るコミュニケーション  
環境が悪くな  
ってきており、妻  
を亡くしたうえ、

入院中の制約もあり、  
要望集めと要望書づくりがむ  
ずかしくなってきました。患者・  
障害者の気持ちや声が反映した、  
団体、施設の生の声を集約した要  
望書にするために、「伝の心」に  
よるメールのみに依拠した要望集  
めに限界があります。

「伝の心」ではインタビューや

新聞取材を受けることはできません。あらかじめ私のプロフィール、情報を得る方法、コミュニケーションの方法などの質問事項をメールで送っていただき、面会したとき回答文書を準備します。

病院内でも意思疎通支援などで、重度訪問介護ヘルパーの利用ができるようになりました。重度訪問介護ヘルパーを派遣依頼して、回答文書の内容をインタビューアや記者に伝達してもらっています。「伝の心」による意思伝達の限界を補充してもらっています。



▶「伝の心」を使って文書を作成

# 生きる